

P-85 非小細胞肺癌初回化学療法 1 コース目の効果と 2 コース目以降の治療継続についての検討

日本医科大学呼吸器科

○弦間昭彦、竹中 圭、吉森浩三、吉村明修、渋谷昌彦、仁井谷久暢

目的：非小細胞肺癌非切除例に対し、化学療法が広く施行されているが、不必要な治療は避けることが望ましい。今回、初回化学療法 1 コース目の効果と最終的な効果及び予後との関係を検討し、2 コース目以降の治療継続の適応について検討したので報告する。

対象：症例は、1982 年以降、当科にて CDDP を中心とした初回化学療法を施行された測定可能病変を有する非小細胞肺癌 102 例である。

結果：まず、1 コース目の効果と最終的な効果との関係を検討すると、最終的に PR となった 28 例の 1 コース目の効果は、扁平上皮癌 11 例中 10 例が 50% 以上の縮小例であったのに対し、腺癌では、50% 以上の縮小例は 17 例中 10 例のみで、25% - 50% の縮小例が 5 例と多数例存在した。次に、1 コース目の効果別に治療継続と予後との関係を検討すると、1 コース目の効果 25% 未満の症例において、治療継続の意義を認めなかった。

結論：1 コース目の効果が、扁平上皮癌 50% 以上、腺癌 25% 以上縮小の症例は、最終的効果 PR となる症例が多く、治療継続の意義を認めた。25% 未満の症例は治療継続の意義を認めなかった。扁平上皮癌で、25% - 50% 縮小の症例は、放射線療法も考慮し、症例により治療継続を検討すべきであると考えられた。

P-87 肺癌の遠隔転移に対する化学療法の検討

三重大学第三内科

○町支素子、Esteban Gabazza、筒井清行、田口修

目的；遠隔転移を有する肺癌症例において原発巣に対する全身化学療法の効果と転移部位への効果について比較検討した。

対象と方法；対象は1986年5月から1990年5月までの間に当科で全身化学療法を施行した原発性肺癌112例のうち肺癌発見時、あるいは治療の経過中に多臓器転移が確認された45例、うち小細胞癌12例（男/女11/1例、53-75歳）、非小細胞癌34例（男/女26/7例、33-81歳）を対象とした。今回検討した転移臓器は全身化学療法の効果判定が臨床症状や画像診断から可能と判断された骨、脳、肝、副腎、腎、眼底とした。原発及び転移巣の評価については各々独自に、CR：病変がすべて消失、PR：50%以上縮小、MR：25%以上50%未満縮小、NC：25%未満の縮小ないし25%以内の増大、PD：25%以上の増大とした。

結果；①脳転移（SCLC5例、NSCLC6例）：原発巣PRの3/6例で脳CT上MRであったが原発巣MRやNCでは脳CT上NCであった。②骨転移（SCLC3例、NSCLC12例）：原発巣PRの5/8例とMRの1/1例で疼痛の軽減または消失を認めた。③眼底転移（NSCLC2例）：原発巣PRの1/1例で視力の回復を認め眼底鏡にてPRであった。④肝、副腎、腎転移例では転移巣の評価はNCであった。

P-86 小細胞癌におけるアンギオテンシンⅡ昇圧化学療法併用によるCAV療法の効果増強—Pilot Study

健生病院内科¹ 同病理科² 弘前大学第1内科³

東北大学抗研臨床癌化学療法部門⁴

○木村昌宏^{1,3} 宮本裕介¹ 佐藤正昭¹ 青山貞利¹
伊藤しのぶ² 坂田優³ 佐藤春彦⁴

目的：小細胞癌に対する標準化学療法には、CAV療法、CAE療法、PVP療法などが同定され、CAV—PVP交替療法も優れた成績を示して注目された。しかし、CAV療法はPVP療法より成績が劣っている。AT・II昇圧化学療法を併用することで、CAV療法の効果増強が得られるか否かを検討する目的で行なわれた、Pilot Studyの結果を報告する。方法と対象：1988—1989年に当科で治療した小細胞癌6例である。全例前治療を有さない。治療前に患者または家族に十分なInformed Consentを行なった。男性5例女性1例で平均年齢63.0歳である。治療前合併症としてSIADH 2例、上大静脈症候群1例があった。臨床病期はⅡ期2例、ⅢA期2例、ⅢB期1例、Ⅳ期1例である。AT・II持続投与による昇圧下に、CTX 1.2g/m²、ADM 45mg/m²、VCR 1.5mg/m²を、2—4週毎に投与した。判定は日本肺癌学会効果判定基準に基づいた。結果：全例評価可能でCR 3例、PR 1例、NC 2例と良好な奏効率を示した。抗腫瘍効果発現は4—12日と早く、PR導入に要した日数も16—25日と短かった。副作用は全例に口内炎、骨髄抑制をみとめた。1例に薬剤性のSIADHをみとめた。昇圧に関連する副作用はみとめなかった。結論：昇圧化学療法の併用は、CAV療法の効果増強につながることを示唆された。

P-88 進行非小細胞肺癌の化学療法

—シスプラチン導入前後の比較—

長崎大学第二内科

○岡 三喜男、深海 敦、広瀬清人、木下明敏、
谷口哲夫、早田 宏、原 耕平

〔目的〕現在、肺癌の化学療法の中心的薬剤であるシスプラチンの導入より数年が経過した。この時点で、進行非小細胞肺癌の化学療法におけるシスプラチン導入前と導入後の影響について検討した。

〔対象〕1979年から1989年まで、当科で化学療法単独治療を行った75才以下の原発性肺癌82例である。このうちシスプラチン使用（シス群）は33例、非シスプラチン（非シス群）は49例である。

シス群：年令58±11才。腺癌27例（82%）、扁平上皮癌4例（12%）、大細胞癌2例（6%）。Ⅳ期25（76%）、Ⅲ期7（21%）、Ⅱ期1（3%）。

非シス群：年令60±10才。腺癌38例（78%）、扁平上皮癌6例（12%）、大細胞癌4例（8%）、その他1例（2%）。Ⅳ期39（80%）、Ⅲ期9（18%）、Ⅱ期1（2%）。

〔成績〕シス群のMSTは231日、1年生存率33%、2年生存率9%、3年生存率6%、非シス群のそれは151日、27%、2%、0%であった。統計学的には両群間に差は認められなかった。

〔結論〕進行非小細胞肺癌の予後に対してシスプラチンの影響は認められず、今後は副作用、入院期間などを含めシスプラチン療法の適応を検討すべきである。